

「主婦之友」1948年3月号 表紙・裏表紙



昭和十八年三月一日發行昭和十八年三月六日印刷本誌主編左第二十七卷三號毎月一回一日發行大正六年二月十四日第三編郵便部認可

クラブ美身クリーム

ホルモン配合・栄養クリーム

ホルモンが皮膚から吸収され栄養作用をたかめますから寒さや水仕事にもお顔や手がアレません。

婦人・小児に…

消化整腸・栄養充実・母乳分泌促進

ビタレイ錠

消化酵素剤
ビタミン

社会式株薬製陽太 川品京東

ビタレイ錠

消化・整腸
栄養酵母

社会式株品薬治明

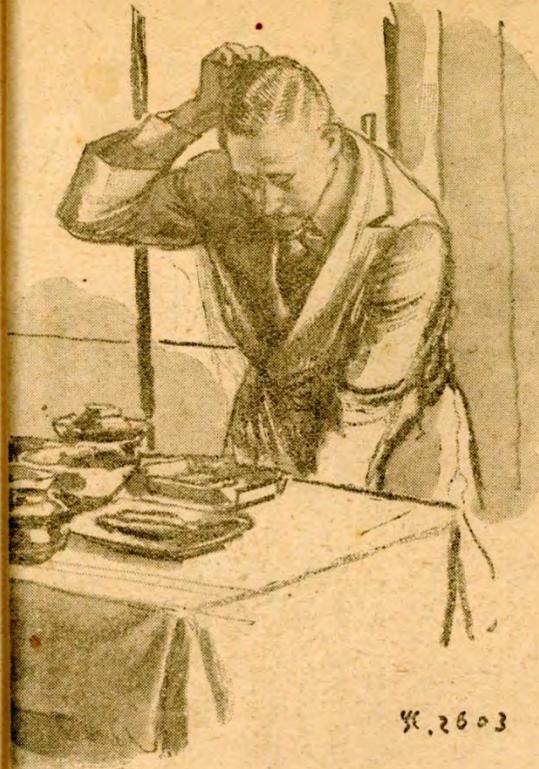
改正定價四十五錢
送料二錢

五〇〇錠
二圓

1592

おばあさん

獅子文六
 田代光畫



2603

「まことに、済まないけどね—— 關口の子供達を、しばらく、あたしの手許へ、預りたいんだけど……」
 おばあさんは、ひどく、いひにくさうに、切り出した。手が掛る盛りの子供を、三人も、引取るのだから、いくら、おばあさんが主になつて、面倒をみるといつても、息子夫婦や、女中達にまで、迷惑を及ぼすのは、知れきつた話である。そこを、無理に頼むので、おばあさんも、できるだけ、下手に出なければならぬ——
 意外な、おばあさんの申出でなので、欣一と瀧子は、返事を控へて、顔を見合せた。
 「あすこの子供は、それア、騒々しいから、ほんとに、迷惑だらうけれど、臥起きも、食事も、あたしの部屋でさせられるから、まあ、暫分、暫分して、おくれでいいよ。」



と、おばあさんは、オソソ、懇願の二の矢を欠いだ。
 子供を預らねばならぬ理由については、極く簡略に—— 後々、關口夫婦が、あまり恥かしい想ひをせぬ程度に、前以つて、語つて置いたのである。
 顔を見合せた息子夫婦は、何事か、チラリと、眼で語り合つた。
 やがて、欣一が、
 「そんなことは、ご遠慮にア、及びませんよ。子供がくると、家の中が賑かになつて、いいですよ。いつからでも、どうぞ……」

と、呆氣ないほど、唯々諸々の返事をした。
 「ほんとですわ。家が廣いの、人数が少いんですから、子供の二人や三人預えたつて、なんでもありませんわ。それで、少しでも、關口さんの方のお役に立つんですなら……」
 と、瀧子も、二つ返事で、苦もなく、承知をしてくれた。
 「いつもと、だいぶ、違ふやうだけ……」
 おばあさんは、眉毛に唾をつけた、氣持だつたが、事情が切迫するので、そんなことに拘泥してゐられなかつた。
 「ちやア、さうして貰ひますよ。關口の家も、年中、ゴタゴタしてるから、今度は、根々切り葉切りに、始末をつけてやらなければならぬでね。それには、どうしても、子供達を……」
 せ、おばあさんが、辯明をしようとしても、欣一は、半分も聴かずに、
 「いゝですよ、お母さん。ちつとも、氣になさることはありません。八重子の問題は、お母さんにお任せするのが、一番なんですからね」
 さういひ捨て、彼は、出勤の支度を始めた。
 ヤレ／＼と、安心して、部屋へ引き下つたおばあさんは、暫く考へてゐたが、やがてまた、中廊下の電話の方へ、立つて行つた。おばあさんが、自分で電話をかけるなんて、滅多にないことだつた。
 關口醫院へかけて、奥さん呼びだして——
 「あゝ、もし／＼……こちらは、用意ができましたよ。いつからでも、子供を寄越して下さい」

「あら、兄さんや嫂さんも、承知して下さいましたの？」
八重子の聲は、なにやら、悲しげな響きがあった。
「ええ、無論ですよ。これで、もう、子供の方は、カタがついたわけだ
が、お前さんの方は？」
「あたしの方って？」
「家政婦になつて、働くつもりぢやなかつたかね」
「ええ、その心算ではありますけど……」
「心算だけぢや、駄目ですよ。サッサと、運ばなければ……」
「ええ、子供達を出しましたら、明日にでも……」
「明日といはずに、今日お始めなさい。どこの派出婦人會でも、人が足
りなくて困つてるさうだから、口は、すぐありますよ……はい、さよな
ら」

おばあさんは、膠もなく、電話を切つてしまった。
それから、おばあさんは、女中と一緒に、縁側に、蒲團を干した。そ
れが済むと、お菓子の買出しに、女中を走らせた。勿論、どつちも、小
さなお客様達に對する準備であつた。
夕方近くなつて、身の廻りの衣類と、學校用具を籠に詰めて、三人の
子供が、女中の松やに連れられて、到着した。
「こんちは、おばあさま……。お休んでもないのに、おばあさまンとこ
ろへ、泊りにくるなんて、ずるぶん、面白いわね」
秋子は、年嵩だけに、なんとなく、不安を感じてるやうだつた。
「でも、あたし、嬉しいわ。明日から、省線へ乗つて、學校へ通へるん
ですもの……」
白金の國民學校へ、荻窪から通學することになつてゐるのを、鶴子は、
なにより、喜んでゐた。

秋子が、即座に、さう答へたところをみると、メソメソした愁嘆場な
ぞは、なかつたらしく、おばあさんは、それを、娘にしては、大出来だ
と考へた。
子供達は、たゞもう、おばあさんの家へ泊りにきたのが、嬉しい様子
だつた。やがて、丸子が、學校から歸つてくると、いよいよ、陽氣にな
つて、嬉々廻つてゐた。子供好きの丸子は、
三人を、風呂に入れたり、和服に着換へさせし
たり、頻りに、お姉さん振つてみせた。
晩飯は、やはり、母屋の茶の間で、喰べる
ことになつた。欣一は、まだ歸らなかつたが、
三人の子供が揃へた食卓は、急に狭くなつて、
茶碗や皿鉢が、瀬戸物屋の店さきのやうに
列んだ。
「まあ、賑かぬ」
丸子が、感嘆の聲を揚げた。
「ほんと——子供つて、まつたく、陽氣なも
んね」
鶴子も、實感を聲に表した。
「賑々しくなつて、濟まないよ」
おばあさんが、軀を小さくして、さういつた。だが、それは、おばあさ
んのヒガミといふもので、籠子にしても、急に明るくなつた茶の間の空
氣を、決して、迷惑には思つてゐなかつた——少くとも、また今夜は、
子供達は、自分の家にあるより、よく喋り、よく喰べた。おばあさん
の隣りに坐せられた正一郎は、ご飯を四杯喰べて、トロンとした眼で、
姉達のお饅舌を聴いてゐるが、やがて、なにか、思ひついたやうに、

「よッぽど、早起しななければ、間に合はないよ。眠いなんて、いひッ
こなしだよ」
おばあさんは、口では強いことをいつても、孫達の顔を見た瞬間から、
涙が溜つて、困つてゐる。
「あらア、眠いなんて、いはないわよ。遠足の時みたいに、一番早く起
きるわ」
「毎日遠足かい？ 叶はないね」
おばあさんは、強ひて、笑つた。
「ボクも、遠足」
七ツになる正一郎が、われもと、話の仲間入りをする。
「ボクちゃんも、まだ、幼稚園だから、おばあさんと、お家で遊ぼうね」
おばあさんも、正一郎だけは、省線電車で、遠くへ通はせるのに、忍
びなかつた。
「あたしは、定期を買つて、學校へいくんだわ」
鶴子は、得意顔だつた。

「あら、ほんと？ あたし達、そんなに長く、こゝのお家にあるの？」
秋子が、おばあさんに、訊いた。おばあさんは、返事に困つた。おば
あさんの腹の中では、今度の事件の解決を、三月も、半年も——定期乗
車券を買ふほど、長引かせたくないのである。
だが、おばあさんは、孫達が、少しも、家の中の出来事を、知つてゐ
ない様子なので、どれほど安心したか、わからなかつた。
「お母さまは、なんといつてたい？」
と、サグリを入れてみても、
「なんとも……。たゞ、おばあさまンところへ、泊つていらつしやいッ
……」

「ねえ、おばあさま、イソローつて、なに？」
「居候かい？ 居候は、つまり……」
おばあさんが、説明の文句に苦しんでゐると、正一郎は、背れツたが
つて、
「泊りにくるのが、居候？」
「なぜ、そんなことを、訊くんですよ」
「だつて、ボク達、今日から、居候でせう？」
と、案ろ、自惚さうに、正一郎がいつた。籠
子と丸子が、腹を抱へて、笑つた。
「誰が、そんなことを、いひました？」
たゞ一人、笑はなかつたおばあさんが、キッ
となつて、訊いた。
「松やが、電車ン中で、さういつたの」
「悪い松やだね」
おばあさんは、苦蟲を噛み潰したやうな顔で、
横を向いた。

二月號までのあらすぢ

おばあさん(納富佳年さん)にだけは何でも打明ける快
活な丸子が、この頃は様方からして平常と違ふ。何か
秘密を？ とおばあさんは睨んだ。長男夫婦が急におば
あさんの機嫌をとり出したのも變だ。おばあさんの心は
突のやうに寂しい。
次女八重子の新達人の不行跡が再燃した。今度のは外
泊するほど本格的だ。現場を掴んだ八重子は、相手の女
が美人ならともかく、と口惜しがる。おばあさんも、今
度だけは、キツバリ別れておしまひとす、めた。
劇に夢中の變物三男三平、その戀人花村マリ子の貧相
なモジャ／＼髪、共におばあさん以外の身内からは、顧
る受けが悪い。おばあさんに齒痒いのは、マリ子のやう
に捨身になれぬ三平の暢氣さだ。おばあさんは老練もら
つかりできない。

おばあさんだつた。
「大丈夫かい？ 子供達が、學校へ連れやしないかい？」
おばあさんは、薬所と隣居部屋の間を、ウロ／＼した。道がおばあ
さんも、すこし、神経質になつたやうだつた。
お前もでき、登校服にも着換へて、いよいよ、子供達が、家を出よ
うといふ時になつて、誰か送つて行くかや、問題になつた。

その日の午近くだった。おばあさんは、正一郎が、そろ／＼お腹の空く時分だと、茶の間へ出張しようとするところへ、女中が、手紙を持ってきた。
 「自動車の運転手さんが、これを……」
 といふ女中の言葉に、おばあさんは、首を傾げた。
 「あたしにかい？ 間違ひぢや、なからうね」
 おばあさんのところへ、自動車をもつて、呼出しが掛つてくるなんて、前代未聞である。まさか、ギャングがおばあさんを、渡つていく企みでもあるまい……
 とにかく、封を切つてみると、達人からの手紙だった。
 是非拜眉の上御高示を仰ぎたき事有之、御老體恐縮ながら、この車にて、宇治山へまで御來降下されたく……
 (なんだい—— 狹隘まできてゐながら、この家へ来れないなんて、意気地のない男だ)
 おばあさんは、苦笑した。宇治山といふ普茶料理が、狹隘の町町地なかにあるのである。
 早く行つては、値打ちが下るので、おばあさんは、できるだけ、支度の手間を省けた。やつと、玄關まで出ると、顔馴染みの運転手が、お辭儀をした。關口醫院の往診用のダットサンが、門の外に待つてゐた。
 (勿體ないよ—— こんなことに、ガソリンを費つて)
 宇治山は、線路の向側にあるが、自動車で行けば、三分もかゝらなかつた。式廳へ出迎へた女中は、心得た顔で、奥まつた座敷へ、案内した。
 「おばあさん……ご足勞を願つて、なんとも、相済みません……」
 おばあさんの顔を見るや否や、達人が、パツタのやうに、洋服の肘

して、皮肉な第一石を置いた。
 「それが、グツと、臍に應へたのか、達人は、暫く黙つてゐたが、もう、見榮も外聞もなくなつたといふ風に、
 「おばあさん……どうも、弱りました」
 「へえ、なにが、弱りました？」
 「人が悪いなア—— なんからなにまで、知つてらつしやる癖に」
 と、怨めしさに、達人は、おばあさんを眺めた。そこへ、女中が、料理を列べて去つたが、達人は、箸をつける様子もなく、
 「實際、僕が悪かつたんです。僕の悪いのは、わかつてますが、しかし……」
 「そんなに、お前さんが、悪いんですか」
 「え、とても、悪いんです。大いに、悪いんです」
 と、立派な男が、頻りに、自分の悪口を力説してゐるのは、滑稽だった。
 「へえ、そんなに、悪いのかい」
 「少くとも、齋木もと子に關する件は、僕が悪かつたんです。しかし、誰です、齋木もと子といふのは……」
 「おばあさん……あんまり、苛めないで下さい」
 達人は、泣き出しさうな顔をした。そこで、おばあさんも、一寸、手を絞めて、
 「でもね、八重子のいふことばかりで、判斷しちやア、片手落ちになるからね。こんなことになつてしまつた理由を、お前さんの口から、ひと通り、いつてみたらどうですか？」
 「いえ、僕も、おばあさんに、それを聞いて頂かうと思つて、お出でを願つたのですが……」

を張つて、平伏した。
 その様子を見ただけで、
 も、彼が、どれほど、
 今度の事件で弱つてゐる
 かと、おばあさんには
 推察できたが、素知ら
 ぬ顔で、
 「わざ／＼、お招きを
 ありがたう。今日は、
 病院は、お休みですか
 い？」
 「いえ、その……それ
 どころぢやありません
 ので……」
 と、頭を掻きながら、
 口吃つた様子は、ひど
 く殊勝で、平常の達人
 の面影はなかつた。
 「なんにしても、お忙
 しくて、結構ですね」
 おばあさんは、今日
 こそ、腕に撻りをかけて
 て、達人の油を拂つて
 やらうと、考へてゐる
 のだが、まづ、悠々と

達人は、ことの仔細
 を、語り始めた。
 齋木もと子が、彼の
 亡き友人の、妹であ
 り、銀座の喫茶店に働
 いてゐたのを、彼が救
 ひ上げた由來は、この
 春の閑着の時に、おば
 あさんも、既に聞き知
 つてゐた。その時分、
 達人には、疚しい心はな
 かつた。女の方でも、
 感謝以上の氣持はなかつた。しかし、あの閑
 着の後に、女の生活費
 を、八重子の手から送
 るやうになつてから、
 却つて、悪い事態が起
 きた。彼女は、八重子
 が送金の時に出した手
 紙を讀んで、なにか非
 常に憤慨したらしく、
 もう、一切補助を受け
 ないといつて、産婆學
 校もやめて、再び、喫

庭家るす愛がわ

石川武美著
 愛する生活
 わが(生活建設の名著)
 石川武美著一冊八十錢送料廿錢
 好評 朝鮮語版、五十錢送料廿錢

主婦之友
 石川武美著
 前田青洲畫装釘上製本
 定價 一圓八十錢送料廿錢

どうぞお近くの書店で今すぐお求めください
 振替東京一八〇 主婦之友社

吉岡彌生先生
 (女子大石原謙先生)
 家庭をめぐつて
 人生を語つた書
 家庭をめぐつて
 人生を語つた書
 家庭をめぐつて
 人生を語つた書

母の愛育全集

新學期(分賞好評)
 第一巻 幼児の巻 第三巻 兒童の巻(上)
 第二巻 幼児の巻 第四巻 兒童の巻(下)
 第五巻 少年少女の巻

▲家庭における子供の鍛錬
 ▲乳兒から青年までの子供の躾け方
 ▲青木誠四郎著 一冊五十錢 送料十五錢
 ▲霜田静忠著 一冊五十錢 送料十五錢

全部實物大型紙に説明書つき
 ●運動靴と地下足袋の作り方
 ●男女兒用通學服の作り方
 ●大日本婦人會々員制服の作り方
 ●婦人用下着と下穿の作り方
 ●婦人用ブラジャーとセカートの作り方
 ●赤子やんぐら一切の作り方
 ●赤子やんぐら一切の作り方
 ●赤子やんぐら一切の作り方

お早くお求めを 主婦之友社

茶店勤めを始めた。達人は、彼女を慰めるつもりで、足繁く、その店へ通ふうちに、次第に、彼女に愛着を感じるやうになつた。しかし、彼女の方は、以前と變つて、スツカリ、自堕落な風に染まつて、寧ろ、達人を軽蔑するやうな態度を見せてきた。

「正直に、白状しますが——彼女が、そんな風になつてから、一層、僕は惹きつけられたんです。いよく、夢中になつてしまつたんです。誰が見たつて、八重子より、容貌も悪ければ、頭腦だつてよくない女なのに、不思議と、氣に入つてしまつたんです。いや、八重子より、容貌が悪くて、人間がバカだから、氣に入つたのかも、知れません。なぜといつて、おばあさんの前ですが、八重子ときた日にア、自分が美人だつていふことを、自覚し過ぎてみますよ。あたしは美人だ——美人の妻をもつた良人は、幸福だ——といふ氣持が、一々、顔へ出るんだから、やりきれたもんぢやありません。さう恩に被せられると、美人なんて、あんまり、ありがたくなりません。美人より不美人の方が、よっぽど、嬉しくなります。僕が、外で遊ぶやうになつたのも、原因は、そこにあるんです。家へ歸つて、また、あの美人の面を見るのかと思ふと、つい、足が疎んで……」

達人は、贅澤な不平をいつた。
 「確かに、そのとおり——そが、八重子の一番、いけないところですよ。だけど、達人さんも、なにか、かう、鼻の尖きに、ブラさがつてるものは、ないかね」

「僕ですか。さア……」
 「例へば、おれの手に掛れば、大抵の病人は助かるとか……おれの病院ほど流行る病院は、一寸、市中にもあるまいとか……だから、少しづら

み、道樂をしてもよからうとか……」

「や……これは、どうも……」

「それだよ。そが、つまり、お前さんの家が、うまく行かない原因なんだよ。自惚れ同志が、寄り合つてるからなんだよ。天狗と天狗が、鼻をつき合せてるからなんだよ」

「いや、さう仰られると……」

達人は、思ひ當ることもあつたか、頭を掻いた。

「まア、そんなことは、後廻しにして、齧木といふ女の話は、それから、どうなりました？」

と、おばあさんは、再び、肩根に皺を寄せて、訊問を續けた。夫婦の間の火事は、夫婦で消し止められる場合があつても、他人に燃え移つた火は、さうはいかない——(つづく)

★刊社友之婦主★

岡田禎子著(二圓・送料十五銭)

新刊 **病院船從軍記**

好評刊 印のお話 木下仙・下谷徳之助著
 近刊タイ・佛印・マライのお話 木下仙・下谷徳之助著
 決戦下の生活本多 藤六著 ぼく笑む心 大森洪太著
 幸福なる生活本多 藤六著 明けゆく空 大森洪太著
 夫婦教育 相馬 黒光著 夫と妻 細川 武子著

◎即刻書店でお求めください 東京神田・馬場一八〇 主婦之友社

おばあさん

獅子文六
 田代光畫

支那料理の、薬風な、コッチリした精進料理が、次から次へ運ばれてくるのを、おばあさんは、静かに箸をつけるが、關口達人の方は、それどころではないといつた調子で、

「で……その、お懐かしい話ですが、僕も、スツカリ、逆せ上つてしまつて、つい、よからぬ野心を起したんです。つまり、その、八重子に秘して、彼女を……」

と、冷汗を流さんばかりに、首筋のあたりを、撫せた。「なるほど、よからぬ野心ですね——親友の妹さんに、そんな料簡を起しちやア」

おばあさんは、叱るよりも、寧ろ、批評するやうにいつたが、それが却つて、達人には辛いらしく、

「仰存とほりで……」
 「で、望みどほり、二號さんとやらにしたわけですかい」
 「それがです。幸か不幸か、さう簡単にいゝかなくて——彼女に、その話を切りだしてみると、承知するやうな、しな中は、さうではなかつた。達人が、その女を連れて、歌舞伎座へ行つたことは、八重子の口から、おばあさんも、聞いてるのである。それが、つまり、今度の事件の發火點だつたのである。

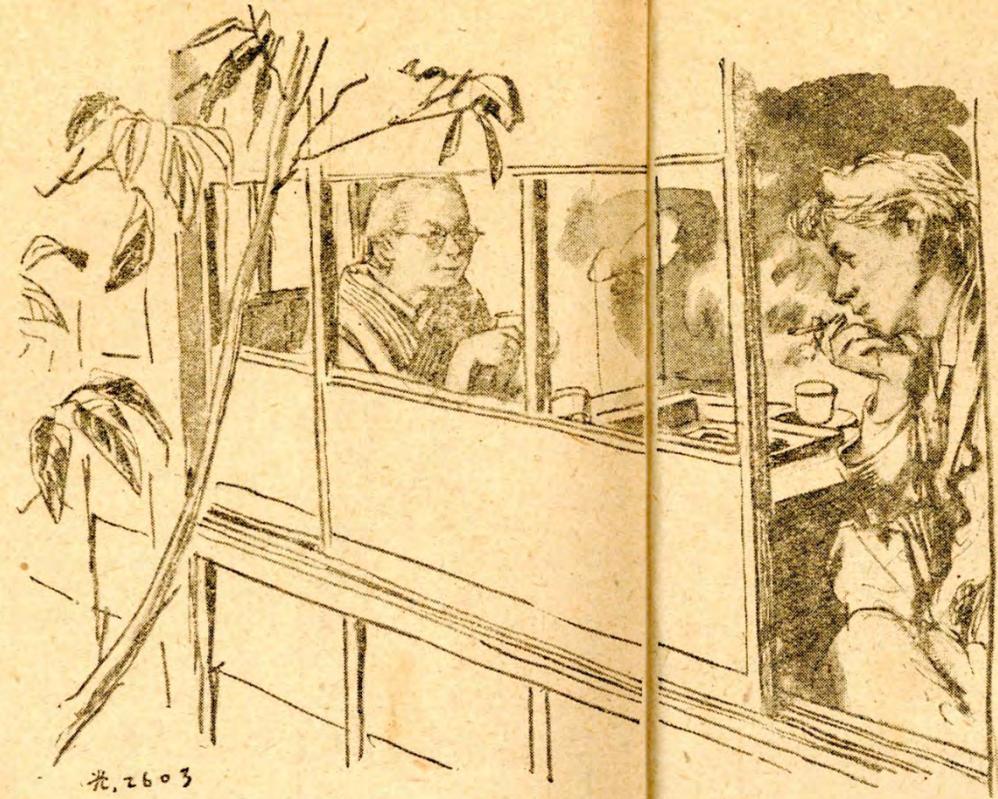
(それを、自分でいふところをみると、この男は、本気で、白狀してゐるらしい。では、あたしも、本気で、聞いてやらうか)

おばあさんは、さあらぬ體で、耳を立てた。「ところが、おばあさん、悪いことはできませんよ」
 達人は、語調を變へた。

「なにが？」
 「八重子が、その晩、歌舞伎座へ來とつたです」
 と、達人が、事々しくいふのを聞いて、おばあさんは、可笑しくなつた。さては、達人の方でも、知つてゐるとみえる——

「へえ、八重子がね——間の悪いことだね。で、双方、顔を合したのかい？」
 「い、え、顔は合しませんでしたが、八重子は、確かに、僕達を發見してゐました。食堂の入口の雅香の中でしたが、ビク／＼震へてゐるんです、あれア、ヒステリー發作の前驅症狀で、精神の激動なしには、起らん現象ですから……」

「追かに、お醫者さんは、眼が高いね……。そこで、お前さんは、どうしました？」
 「僕も、震へました」



光, 2603

いやうな、實に、曖昧な態度なんです。そのために、僕は、一層、苛らされて、遂に、或晩、彼女を、歌舞伎座へ引ッ張り出したんです。芝居の歸りに、是が非でも、彼女を承知させようといふ計畫で……」
 と、達人は、穴にでも入りたいやうな、顔つきだつた。

「へえ、歌舞伎座へね」
 おばあさんは、また、第三者のやうな、不熱心な返事をしたが、腹の



母の手

寺内萬治郎画

よくこそやつてくれました。もう一度元気で御奉公を頼みますよ。母の心は、あたゝかくもきびしく、傷ついた子の掌に通ふ。勇士の瞳には、固い再起の決意が宿つた。海軍病院の純白の寢臺に、五月の光は静かに明る。

(海軍省検閲済)

(1)



◆母の生活(寺内萬治郎画)
戯曲 海ゆかば 菊池寛
 寺内萬治郎画

◆眞剣を誓ひ眞剣を祈る
 ○農園うた日記
 ◆貯蓄を生み出す内職と副業の増収実践三十種(東京府岡大坂貯蓄地調査)
 ◆配給材料で工夫した健康料理とお辨當の作り方二十五種
 ◆満洲の働く娘の生活座談會
 ◆満洲の満洲の家庭の栄養料理とお菓子の作り方
 ◆眞剣を誓ひ眞剣を祈る(南都ルソン宣揚行)

◆マヨンの煙
 ○火無し煙燻の作り方と使ひ方
 ◆子供達の病氣の家庭看護法
 ◆賢母・慈母
 ◆戦時即應防空必勝の秘訣
 ◆戦時主婦の貯蓄報國座談會(氏家大蔵省國民貯蓄局長)
 ◆妊娠と安産の秘訣(妊娠十月産生の巻)
 ◆第六回健康なほまれの子(表彰發表 雅應書集)

◆文
 ○月から来た男(田村孝介著)
 ○おばあさん(田代光著)
 ○希望の嵐(高木聖太郎著)

◆小説載連
 鳥(三芳博吉著)
 男(田村孝介著)
 男(田代光著)
 嵐(高木聖太郎著)

つこの型紙で五つの型に應用できる
春から夏への婦人ブラウスと子供服勇物作方
 古物を刺繍で生かす更生縫の獨習法
 五月のお物業献立(よみ・家庭で手軽にできるお菓子の作方十種)

石川武美(七)
 石坂洋次郎(三)
 齊藤弘夫少佐(元)
 藥田重遠(一)
 田積重遠(一)
 山田康(一)
 豊(一)

目次 (次目)

いさだくてし覽週へ所近御らかすまりをてし足不に特近最は『友之婦主』

ピースあいち・メールマガジン102号 2018年5月号 「所蔵品から」画像
「主婦之友」1948年4月号表紙・1948年5月号表紙

